

STAGE 2 文学的文章 I

解答(P 7 ~ 13)

[2]

- (ア) 1 (イ) 3 (ウ) 2
(エ) 神域の山で楽しく一日を過ごした(15字)

(オ) 2

(カ) (例) 最初は山太が話す内容に疑心暗鬼であったが、巖さんの経験や山太の寝顔から、納得しようと思いは始めている。(50字)

(キ) 4

解説

[2]

(ア) [A]の直前で「ヨキ」の「ビュートてのはなんや」と問いかけに対して、「山太」が「飛んだんさ」と答え、直後に「両腕を広げた」と書かれていることから、自分が初めて体験したことを、無邪気に生き生きと「ヨキ」に説明しようとしたと考えられる。したがって、「うれしそうに」を入れるのが最適である。また、[B]の直前で、「三郎じいさん」が「山太は神さんに会うたんやなあ」と言い、それを受けて「巖さん」も直後で、「俺のときとおんなしや」「記憶をたどる声音」で言った点を踏まえて考える。かつて「巖さん」も経験したことを振り返りながら、感慨深く発言している部分であると考えられる。したがって、「しみじみ」が最適であり、正解は1になる。

(イ) 「気を揉む」とは、あれこれと心配するとの意味である。——線1の直前で、「山太」が神去山まで来た方法や、誰かに連れ去られたのか、どんなことが起こったのかと、「山太」のことをあれこれ心配している様子が読み取れる。この点を踏まえて考える。

とを気にかけているというより、かつての出来事を懐かしんでいる様子が読みとれる。これを踏まえて考えると、1の「これ以上問いたとしても仕方ないと思っている」かどうかは、文章から読み取れない。3の「ときに説明できない不思議なことも起こるものだ」は、——線4の直前の会話の内容を十分踏まえた説明とは言えない。4の「威厳ある山の神に受け入れられた証である」と確信し」は、文章から読み取れないので、誤りである。したがって、正解は2である。

(カ) 「俺」は、「山太は神さんに会うたんやなあ」という三郎じいさんの発言までは、「山太」の言う、季節にそぐわない果物を食べたことや、空を飛んだこと、白や赤の服をきたお姉さんに会ったことなど、その内容があまりに現実離れしていて、全く理解できないでいる。そのことは、「俺はヨキと顔を見合わせた」や「俺は首をひねる」などから読み取れる。しかし、同じ体験をしたことがあると言う巖さんの発言や、「山太のすやかな寝顔を見るうち、まあいいかと思えてきた」とあるように、「俺」はこれ以上追究することをやめようと考え始めていることが、「それでいいじゃないのか」や「山ではどんな不思議が起こっても、ちっとも不思議ではないんだ」との発言から読み取ることができる。これを踏まえて、「俺」の変化について、条件に合うように説明する。

(キ) この文章は、全てにわたって「俺」の視点から描かれている。それは、文章の随所にある「俺たちは」や「俺も」などの表現から主体が「俺」にあることが読み取れる。この点を踏まえて、「それにしても、どうやって……」といった山太の身に何が起こったの

1の「真実を知るのが怖い」は、「気を揉む」にそのような意味は含まれない。2の「山太」の怪我の具合が気がかり」とあるが、「山太」が怪我をしている様子は、文章から読み取れない。4の「神去山で何が起こるのか、展開に不安を抱く」は、神去山について心配をしているのではない。したがって、正解は3である。

(ウ) ——線2の直前で「今度は白い服の女か。……消防署員と病院関係者か?」と、山太の言ったことに困惑する「俺」の様子が書かれている。これをうけて「ヨキも」とあることから、同様の困惑をしていると考えられる。これを踏まえて考えると、1の「途方に暮れている」は言い過ぎである。理解しようとして出来ないでいるのである。3の「山太」に、驚きあきれている」は、文章の内容に合わない。4の「動揺と興奮を隠せないでいる山太」とあるが、文章から「山太」の動揺は読みとれない。また、「どうなだめたらいいか」と考え困っているのでもない。したがって、正解は2になる。

(エ) ——線3の直後の「巖さん」の発言に注目する。「……俺も山太と同じように……神去山で笑うとったそうや」とあることから、「巖さん」も今回の「山太」と同じように、かつて神去山で楽しい時間を過ごした経験があったことが読み取れる。このことを表した部分を、条件に合うように文章中から抜き出して答える。

(オ) ——線4の直前の、「巖さん」と「三郎じいさん」の会話に注目する。「巖さん」が、「もう何十年前になるかなあ。……神去山で笑うとったそうや。自分ではよう覚えとらんやけどな」と言ったことについて、「三郎じいさん」が、「そやった、そやった」と、かつての出来事を思い出し、さらに「……四十八年前やのう」との「三郎じいさん」の発言を受けて、「そないになるかいな」と「巖さん」が答えていることから、二人は「山太」の行方不明のこ

か」や「そう思ったけれど、……それでいいじゃないか」など、「俺」が心の中で感じたことを詳しく描写している点から考える。1は「俺と山太の両方の視点から描かれている」が誤りである。2は「あえて視点を固定していない」も同様の理由で誤りである。3は「三人称の視点は文章に登場していない」とあるが、第三者的立場の視点は文章に登場していない。これも不適である。したがって、正解は4である。

- 2 (ア) 2 (イ) 4 (ウ) 人間がそこに溶け込むところ
- (オ) (エ) 3
- (例) 小さいときは、大人によって受け継がれた言葉から考
え方や感じ方などを学び自己を形成していきながら、社
会を動かす力を持つようになると、自分の経験をもとに
新たに言葉を作り、またそれを子供に伝えるということ
を繰り返しながら、日本人のあり方を形成してきたとい
うこと。(128字)

解説

2 (ア) A の直前で、英語とドイツ語の社会では「申し」と「言う」の観念の区別がないと述べられていて、それは直後で、ヨーロッパ語の方が言葉の数が少ないということではないと確認していることから、「もちろん」を入れる。また B は、直前で、日本人は自然を人間に対立する物として長い間捉えてこなかったことが述べられていて、その結果、自然を一つの物と見る考え方を身につけずに来た直後の説明につながる。前後で原因結果の関係になっているので、「だから」が最も適する。したがって、正解は2である。

(イ) 線1の直後で、「申す」と「言う」という言葉を例として挙げながら、日本語には区別があるが、英語やドイツ語には観念の区別がないように、話す言語によって、このような区別は国ごとに異なるのである。それは、「長い歴史の時代を通じて日本人の間に生きており、今日も依然として尾を引いて」いるのである。つまり、それぞれの国の長い歴史の中で、人々の生活の中で育まれたものが今日まで影響を与えているということである。1は「表すべき敬意の度合いが異なる」が、2は「どの言葉も区別はするが、重要度が異なる」が、3は「言葉の持つ意味の範囲も異なる」がそれぞれ誤りである。

などを決定的につくりあげるのではなく、人々も自分の経験を踏まえて言葉を変形させたり、新しい言葉をつくり出したりして、よりよい表現を求めると論理が展開されている。そして、言葉の変遷をみるのがこれから先の生き方を考えることにつながる。結論付けている。この点を踏まえて考えると、正解は1となる。2の「多くの言葉を学ぶべき」とは本文で主張されていない。3の「変化を読み解くことで、時代が何を求め」ているのかと考えられるとは書かれていない。4の「言葉の意味や使い方を容易に

(ウ) 日本人が自然を人間に対立するものではなく、どのように捉えているかは、——線2の直後から続くヨーロッパとの比較の中で述べられている。ヨーロッパ人は自然を、自分に対立した存在として、人の手を加える「創造する対象」としてきたのに対して、日本人は自然と一体化し、溶け込むことを大切にしてきたという内容であり、「日本人は……」と書いている」の部分で設問の話題に対応する。

(エ) 理由については、——線3の直後の文で述べられている。「年をとり、広い意味での社会的な力が認められて来ると……新しい言葉、言葉の変形、意味のずらしによって表現しようとする」と書かれてあることをもとに考える。すると、1は「ひとつの言葉がもつ意味の範囲が限りなく広がっていく」が誤り。2は「間違った表現であっても何の疑いもなく使う」が誤り。4には「他の体系を持つ外国の言葉を学ぶようになる」とあるが、本文中には書かれていない。したがって、最も適する説明がされている3を正解に選ぶ。

(オ) まず、「二つの力」について考える。二つの力とは、ここでは直前部分に書かれている「言葉が人間を作る」とことと「人間が言葉を作っていく」ことである。それらが螺旋のようにかわるがわる働きながら日本語の長い歴史を作ってきたのである。「螺旋」とは、ぐるぐると巻いているものを指す。これは、言葉を学びながら人間を形成し、社会を動かすようになると、新たな言葉を作り出し、そして、作り出された言葉を、次の世代が再び学び人間形成しながら、また新たな言葉を作り出す流れを示している。長い歴史の中で幾度となく繰り返して行ってきた中で、今日に至る日本語を作り出してきたことを、条件にあわせて説明する。

(カ) 本文では、最初に「申す」と「言う」の区別が日本語にあるが、外国語にはない点に触れ、そこから「自然」の概念について、日本とヨーロッパを比較しながら、言葉とはその国の長い歴史の中で人々の思想や習慣、価値観によってつくりあげられていることを述べている。そのうえで、言葉は人間のものと考え方や感じ方

STAGE 8 古文読解 I

- 2 (ア) 1 (イ) 1 (ウ) 4 (エ) 2 (オ) 1

解説

2 (ア) 最初の文に、「友に交はる道は、いかなることか心得べき」(友と交わるには、どのようなことに気をつけるべきか)とあるので、友との交わりについて書かれた文章だと考える。

(イ) 「ひがごと」は、「道理にはずれたこと、まちがい」をいう。

(ウ) 傍線部の直前の文中にある「おなじ心なりし」の部分から「心」があてはまる。

(エ) ここでの「長じ」、「みじかし」は、長さのことではなく、ものごとの「長所」と「短所」のことである。

(オ) 初めに「友はその所長を友とすべし」(友は、その道で長けた者を友としなさい)とある。

【口語訳】

「友に交わる道はどのようなことに気をつけるべきか」というと、友はその道で長けた者を友としなさい。歴史が好きなのは、その道で長けた者を友とし、武芸を好む人はそれに長けた者を友とし、歌を詠む者は、その道に長けた者を友とすとい。しかし、歌であっても、この和歌の詠みぶりは悪い、その人に学ぶのは間違っているなどというのは、言うに及ぶまい。ただ交わっているだけだろう。昔の管鮑の交わりといえども、このふたりが、同じ徳、同じ心というわけでもない。世の中に同じ心の人というものは、めったにいないものである。この人は、この点はすぐれているけれど、ここはたいそう劣っている。その劣っているところを直そうとするのは、とても大変だ。そのように思うのもまた、その劣っているところがあるのをことさらに思い、みな教えさとし、直そうとするのを、(友と交わることだと)信じるのは間違っていた。交わる人の中で親友となる人は大変まれである。